

高岡町埋蔵文化財調査報告書第13集

高岡町内遺跡V

1997. 3

宮崎県高岡町教育委員会

高岡町埋蔵文化財調査報告書第13集

高岡町内遺跡V

1997. 3

宮崎県高岡町教育委員会

序 文

高岡町は、宮崎市の近郊に位置し、大規模な諸開発の増加が予想されます。高岡町教育委員会では、これらに対応するため、調査体制を整えるとともに、1991・1992年度に実施した町内遺跡詳細分布調査の結果をもとに、開発に伴う遺跡の確認を目的とした町内遺跡発掘調査を実施しております。本書は、1996年度に実施したそれらの調査の報告であります。この調査が、開発と埋蔵文化財の保存とが共存しうるきっかけになることを希望します。

最後に、調査に御協力頂いた諸関係機関や地権者の方々に深く感謝申し上げます。

1997年3月

高岡町教育委員会

教育長 篠原 和民

例 言

1. 本書は、高岡町教育委員会が文化庁・宮崎県教育委員会の補助を受けて実施した町内遺跡発掘調査の報告書である。

2. 調査は下記の体制でおこなった。

調査主体	高岡町教育委員会
教育長	樋原和民
社会教育課長	小谷清男
社会教育課長補佐	梅元利隆
兼社会教育係長	
庶務担当 社会教育係 主査	春口洋子
調査担当 同 係主任主事	島田正浩
同 係主事	今城正広
調査指導 県文化課 主査	永友良典

3. 調査ならびに報告書作成にあたっては、[]

[] (以上同僚埋蔵文化財調査室)、[] の協力を得た。

4. 本書に使用した地形図の縮尺は、第10・11図以外はすべて1万分の1である。

5. 本書の編集は島田がおこなった。



図版1 作業風景

目 次

Iはじめに	7
1高岡の環境	9
a自然環境	9
b歴史的環境	9
2調査の目的	13
a高岡の開発について	13
b今年度の開発事業における対応について	14
II確認調査	15
1東高岡地区	17
a荒平第2遺跡	17
2高浜地区	18
a小畠遺跡	18
3移佐地区	18
a八児遺跡	18
4内山地区	21
a田中遺跡	21
b朝羽田遺跡	22
c高岡麓遺跡	23
5浦之名地区	28
a水流口遺跡	29
b久木野遺跡	29
c茶屋原遺跡	30
III調査	31
1榎原遺跡	33
a遺跡の環境	33
b調査経緯	33
c調査経過	34
d調査概要	34
eまとめ	37

挿図目次

第1図 高岡町遺跡分布図	11~12
第2図 荒平第2遺跡調査位置図	17
第3図 荒平第2遺跡基本柱状図	18
第4図 小畠遺跡位置図	18
第5図 小畠遺跡調査地周辺地形図	19
第6図 八児遺跡位置図	19

第7図	八尻遺跡第Ⅱ区調査地周辺地形図	20
第8図	田中遺跡調査位置図	21
第9図	朝羽田遺跡調査位置図	22
第10図	高岡麓遺跡周辺地形図	24
第11図	高岡麓遺跡調査位置図	26
第12図	高岡麓遺跡第10地点基本柱状図	28
第13図	一里山地区遺跡分布図	28
第14図	水流口遺跡調査地周辺地形図	29
第15図	久木野・茶屋原遺跡調査地周辺地形図	30
第16図	桜原遺跡周辺地形図	33
第17図	桜原遺跡座標関係図	34
第18図	疊群構成縁属性グラフ	36
第19図	疊群構成縁分布図	36
第20図	遺物分布図	37
第21図	出土遺物実測図	38

図版目次

図版1	作業風景	4	図版19	朝羽田遺跡	22
図版2	向屋敷遺跡	9	図版20	高岡麓全景	23
図版3	橋上遺跡	9	図版21	高岡麓町屋街路	23
図版4	橋山第1遺跡B地区	9	図版22	高岡麓街路	23
図版5	久木野遺跡第2区	10	図版23	内山神社	25
図版6	久木野遺跡第1区	10	図版24	安藤家武家門	25
図版7	蕨野遺跡	10	図版25	龍福寺跡	25
図版8	移佐城跡	10	図版26	高岡麓遺跡第8地点	27
図版9	天ヶ城跡	13	図版27	高岡麓遺跡第10地点	28
図版10	高岡麓遺跡	13	図版28	水流口遺跡	29
図版11	荒平第2遺跡	18	図版29	久木野遺跡	29
図版12	小畠遺跡	18	図版30	茶屋原遺跡	29
図版13	八尻遺跡第Ⅲ区遠景	19	図版31	桜原遺跡遠景	33
図版14	八尻遺跡第Ⅲ区確認調査	20	図版32	桜原遺跡全景	35
図版15	八尻遺跡第Ⅲ区確認調査	20	図版33	焼縁分布状況	38
図版16	八尻遺跡第Ⅲ区作業風景	20	図版34	縄文土器(2)出土状況	38
図版17	八尻遺跡第Ⅲ区全景	20	図版35	縄文土器(1)	38
図版18	田中遺跡	21	図版36	縄文土器(2)	38

表目次

表1	1996年度調査一覧表	14
表2	高岡町内遺跡V報告書登録抄	39

I はじめに

1 高岡の環境

- a 自然環境
- b 歴史的環境

2 調査の目的

- a 高岡の開発について
- b 今年度の開発事業における対応について

1 高岡の環境

a 自然環境

高岡町南部の高岡山地中央部及び東部には白亜紀の四万十累層群に属する砂岩を伴う頁岩、砂岩頁岩互層が分布しており、一部玄武岩、凝灰岩などの塩基性岩類が含まれる。内ノ八重付近の砂岩頁岩互層中には塩基性岩類に伴って、厚さ1m~2mのチャートが見られる。

高岡山地西部には、古第三紀の四万十累層群に属する砂岩を伴う頁岩、砂岩頁岩互層が分布しており、高岡山地を南北に横切る高岡断層によって前述の白亜紀の層に接している。

高岡町の中心部付近及び高岡山地北部には、新第三紀の宮崎層群に属する砂岩、泥岩、砂岩泥岩互層が広い範囲で分布している。本層は四万十累層群を傾斜不整合に覆う海成層で、貝、カニ、ウニ等の化石を含む。さらに、町中心部付近に及び西部は宮崎層群を不整合に覆い第四紀の疊、砂、及び粘土からなる段丘堆積物、主にシラスからなる姶良噴出物、及び主に疊、砂シルトからなる沖積層がみられる。段丘堆積物、姶良火山噴出物は急傾斜とその上の広い平坦面や緩斜面から形成される台地状の地形を有している。沖積層は、大淀川、浦之名川、内山川、飯田川等の河川流域沿いに分布している。

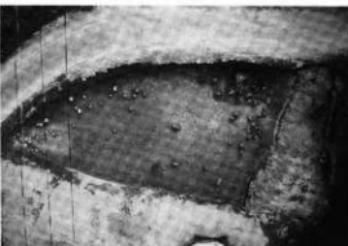
b 歴史的環境

70%以上を山林が占める高岡町は、東に位置する宮崎平野と西に広大に広がる標高170m以上の台地の間に位置し、狭い沖積平野や谷、そして小丘陵に生活の基盤をおいている。このような山々や丘陵などを含めた大淀川に起因する地理的条件は、その時々の人々が活躍するための歴史的要因である中のひとつである。

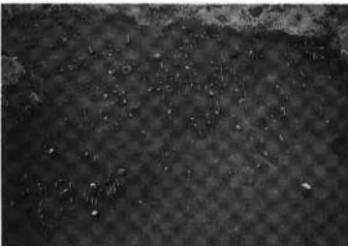
高岡町の遺跡は、現在知られているだけで140箇所あり、それらの遺跡のほとんどは、町中央を東流する大淀川やその支流（内山川・浦之名川など）により形成された河岸段丘状に位置している。

旧石器時代では、表探資料として浦之名一里山地区の剥片尖頭器がある。また、1993年に調査を実施した向屋敷遺跡は、集石遺構と共にナイフ形石器やスクレイバーが出土している。

縄文時代の遺跡は、密度の差こそあれ、河川流域の小丘陵には必ずといってよいほど存在している。特に早期と後期の遺跡が多く知られており、早期は、柑橘栽培による遺構面の搅乱を受けることは少なく、残存状態も良好である。橋山第1遺跡・天ヶ城跡・宗栄司遺跡・橋上遺跡・久木野遺跡の5遺跡で、すでに発掘調査が実施されている。橋山第1遺跡は、早期と後期初頭の遺構遺物が検出された。早期は、幾形式かの集



図版2 向屋敷遺跡



図版3 橋上遺跡



図版4 橋山第1遺跡B地区

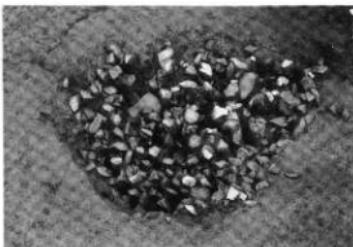
石遺構と、それに伴い、前平・寒ノ神式等の貝殻文系円筒土器や押型文土器、そして、環状石斧などが出土している。後期は、阿高系の岩崎式土器が出土している。また、多くの石錘が出土しており、当時の生活環境を知りうることができる。天ヶ城跡は、標高120mの独立した丘陵に位置し、集石遺構に伴い押型文を中心とした早期の遺物が出土している。また、九州一円からの黒曜石やサヌカイト製の製品が出土し、交易広さを知る手がかりとなる。表掲資料からは、山子遺跡が以前から知られており、浦之名川上流に位置する赤木遺跡と同様に後期の貝殻条痕文土器が表掲される。

弥生時代では、学頭遺跡があげられる。学頭遺跡は複合遺跡であり、時期は中期後半から終末までが確認されている。河川に挟まれた舌状の微高地に位置する生活遺跡である。また、城ヶ峰遺跡では、後期の遺物が出土している。古墳時代では、東高岡地区と浦之名一里山地区の丘陵を中心として遺跡が広がっている。

久木野地下式横穴墓地群で3基の調査が行われておりますり、1984年の調査では鉄斧と玉頭が出土し6世紀前半とされている。東高岡地区的古墳は未調査であるが、その中のひとつ高岡古墳周辺で古墳時代中期の壺と鉄製品（鉄斧など）が耕作中に発見されている。また、学頭遺跡では初頭～前期にかけての遺物が出土し弥生時代から引き続き集落が営まれている。それに隣接した八鬼遺跡でも住居跡が検出されている。

古代は、文献によると高岡周辺は「猿佐郷」と言われていた。古代になると、宗栄司遺跡・蕨野遺跡・二反田遺跡があり前者2遺跡で調査が行われている。蕨野遺跡では、9C後半の土師器生産に伴う焼成土坑（窯）が検出されている。

中世では、12世紀に「島津庄移佐院」といわれ、南北朝期を経て、島津氏と伊東氏の興亡の歴史の中に入っていく。この時代の代表的なものは山城である。南北朝期は、移佐城が日向の中心となり足利氏の九州における勢力拡大の拠点となった。それ以後、小規模な山城が点在したと考えられ、現在10箇所以上（文献等では18箇所）を確認している。移佐城は、三股院高城・新納院高城とともに日向三高城と称されていると



図版5 久木野遺跡第2区



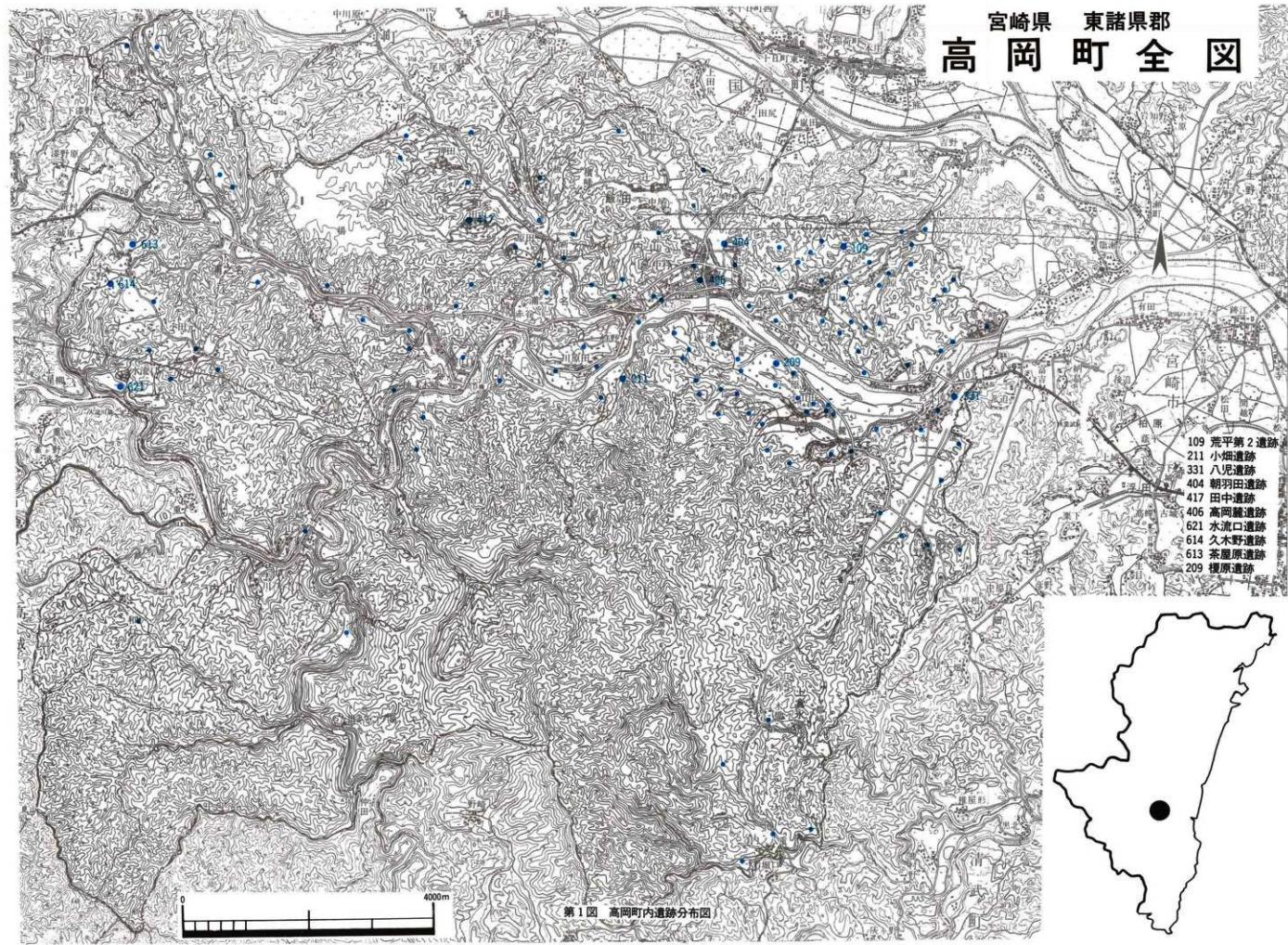
図版6 久木野遺跡第1区



図版7 蕨野遺跡



図版8 移佐城跡



ころである。繩張り調の成果として、南九州特有の特徴をもつとともに、機能分化をもたらした山城として評価されている。その後、穆佐城は、島津久豊（8代）・忠国（9代）の居城、伊東氏48城のひとつとなるなど両氏の勢力争いの表舞台にあたった。また、このころには、山城などの城郭跡以外でも町全体に数多くの遺跡が広がる。

この時期までの中心地が穆佐城周辺だったのに対して、近世になると天ヶ城周辺に一変する。薩摩藩は、天ヶ城（高岡郷）と穆佐城（穆佐郷）の拠地に多くの郷士を居住させた。そして、綾、倉岡とともに閑外四ヶ郷として、特に高岡郷はその中心として薩摩藩の東側の防御の要として発展する。高岡麓遺跡では、計画的な街路設計がなされ郷土屋敷群と町屋群に分割されている。そして、第1次調査における町屋の調査で素堀の井戸や土坑等を検出し、大火跡と思われる焼土層を確認している。また1994年の県文化課による調査では、武家屋敷の一画を調査し陶磁器類を検出している。近世の遺跡は、麓を含めて現在の居住地と重なる場合が多く、表探遺物や石造の墓標の存在からも参考となる。



図版9 天ヶ城跡



図版10 高岡麓遺跡

2 調査の目的

a 高岡の開発について

高岡町は、宮崎市の近郊に位置しているにも関わらず大規模開発というものに縁遠いところである。地理的条件であるわりには、宮崎市の南北に位置する佐土原町や清武町のようなベットタウン化されることはない。埋蔵文化財にいたっては残存している遺跡が多い。しかしながら開発が全くなかったわけではなく、確実に遺跡は破壊されてきたのである。まず戦後の小規模な圃場整備や1965年頃始まったパロット事業、そして、国道10号線バイパスを始め各種の舗装道路、官公庁の庁舎建設、民間では、小規模な宅地造成や個人の農地造成、農作物の栽培での蜜柑やごぼうなどの深耕が必要とするもの。また、近世の中心遺跡の場所に教育委員会施設であるR・C構造の校舎建設がある。

これらの開発は、埋蔵文化財に対する保存の意識はまったくなく、あくまでも生活利益先行の結果である。これは、文化財保護法を実行させるための体制がなかったためで、宮崎県内でそのような体制づくりがなされたのがひと昔前と考えれば、市町村レベルにおいての意識の低さは当然であろう。

さて、最近の町内の傾向は、まず、大規模開発は、ゴルフ場や工業団地造成などが計画されたが、民間開発のはほとんどは法的規制や景気の低迷などで計画の見直しを余儀なくされている。小規模開発については、公共事業を中心毎年コンスタントに事業が計画されている。町の単独事業は事業費が少額で、地下遺構に影響を与える内容の事業のはほとんどは補助事業である。最近の傾向として農道関連の開発が増加している。

個人住宅に関しては、震災の影響で鉄筋または鉄骨構造のものが増加するものと思われたが、今年度に限っては目立った増加傾向は示していない。しかしながら今後建造物の基礎強化により、地下構造に影響を与える工法が増加するものと思われそれらに対応するためのシステムの確立が緊急の課題であろう。

これらの開発に対しては、可能な限りの試掘と立ち会い調査で対応し、破壊される遺跡については本調査を実施している。しかし、これらも事前に計画が確認できるものについてのみの対応であり開発のすべてではない。現在のところ特に小規模な民間開発においては把握するのは困難である。教育委員会で把握できるものは、開発申請や建築の確認申請、農地転用許可によるものであり、それ以外の開発は発見時での対応となり工事の中止・工期の延長を引き起こしている。公共事業においても計画段階で協議を求めてくるのは希望である。発掘調査が事業者側に課せられた義務であることを周知徹底することと、開発に対する埋蔵文化財独自のチェック機構を早急に確立させることが必要である。また、仮にこのように開発の把握が可能になった場合、今の教育委員会の体制では対応することは困難であり、同時に受け皿の強化を図らなければならず、広域的な調査協力やさらには現体制そのものの改革を必要とする時期がすでにそこまで来ていることに我々も気付かねばならない。

b 今年度の開発事業における対応について

今年度は公共事業については、町や県における農業関連事業を中心、諸施設建設については例年程度の規模でありトレンチ等による確認調査を実施した。民間については、まず、宅地造成など宮崎市近郊であるが故の開発が目立ち始め、周知の遺跡のみトレンチ法による確認調査を実施した。個人住宅は、横ばい状態であるが、今年度の対応としては、部分的に発掘調査を実施した。

表1 1996年度調査一覧表

遺跡名	原因	事業主体	調査期間	成果	備考
荒平第2遺跡	土砂採取	民間	8/26	焼跡出土	
小畑遺跡	農道新設	宮崎県	8/6	土師皿出土 陶磁器出土	
八児遺跡第Ⅲ区	病院建設	個人	8/7・11/5~12/14	溝・pit・住居址	本調査
高岡麓遺跡第8地点	宅地開発	民間	5/9	pit・陶磁器	(本調査)
高岡麓遺跡第10地点	店舗建設	個人	8/19	陶磁器	
朝羽田遺跡	区画整理	高岡町	10/3~10/4	陶磁器	(本調査)
田中遺跡	農道新設	高岡町	7/4	—	
水流口遺跡	農道新設	宮崎県	7/25~7/26	—	
久木野遺跡	農道新設	宮崎県	7/26~7/31	焼窯・構文式土器	(本調査)
茶屋原遺跡	農道新設	宮崎県	7/26~7/31	—	
櫻原遺跡	農地造成	個人	5/16~5/24	焼窯・構文早期土器	本調査

II 確認調査

1 東高岡地区

a 荒平第2遺跡

2 高浜地区

a 小畠遺跡

3 穂佐地区

a 八尾遺跡

4 内山地区

a 田中遺跡

b 朝羽田遺跡

c 高岡麓遺跡

5 浦之名地区

a 水流口遺跡

b 久木野遺跡

c 茶屋原遺跡

1 東高岡地区

a 荒平第2遺跡

民間の土取り業者による遺跡破壊に伴う確認調査である。8月に遺跡内で一部土取り作業がおこなわれているところを発見し、事業者に連絡を取り作業の停止を求めた。教育委員会では事業者との間で協議をおこない8月26日に土取り予定地において確認調査を実施した。遺跡は大淀川の北の河岸段丘上の一角にあり、四方を谷に囲まれた小丘陵に立地する。付近には県指定の高岡古墳や土師器の焼成土坑が検出された蕨野遺跡等があり、遺跡がかなり密集しているところである。調査は、 $2\text{m} \times 3\text{m}$ のトレンチを3ヶ所ほど任意に設定し掘削をおこなった。層位は、表土の下はそのままアカホヤ火山灰層となり、その下に牛之脛ローム層が浅く堆積する。さらに、淡褐色粘性土、その下に灰褐色砂性土がブロック状に大量に混じる層となる。この付近では淡褐色粘性土が绳文早期を主体とする包含層として確認されることがある。調査の結果、表土から焼跡が確認されたものの、それ以外は確認されなかった。(島田)



第2図 荒平第2遺跡調査位置図

表 土
アカホヤ
暗青灰色砂性土
淡褐色弱粘性土
灰褐色砂性土
褐色粘性土

第3図 荒平第2遺跡基本柱状図



図版11 荒平第2遺跡

2 高浜地区

a 小畠遺跡

調査の原因は農免農道の新設である。宮崎県文化課と町教育委員会は、事業者である宮崎県中部農林振興局と7月に埋蔵文化財の取り扱いについて協議をおこなった。予定路線内に小畠遺跡の一部が含まれることから路線内において確認調査を実施することとなった。遺跡は大淀川の南岸の低地にあり、遺跡の西側には楠見城跡、対岸には古代から中世に比定される宮の下遺跡や山下遺跡がある。調査は8月6日に2m×3mのトレンチを3ヶ所設定し掘削した。その結果、土師質皿や陶磁器類が出土したが、遺構は確認されなかった。堆積土は砂性の土壤で、遺物の包含は大淀川の氾濫を原因とするものと思われる。(島田)



第4図 小畠遺跡位置図



図版12 小畠遺跡

3 穂佐地区

a 八児遺跡

高岡町教育委員会は、7月に八児遺跡内における診療所の建設に伴い埋蔵文化財の取り扱いについて事業主である[]と協議をおこなった。建設予定地は、1990年に県道の拡幅に伴い八児遺跡第Ⅰ～Ⅱ区とし



第5図 小畠遺跡調査地周辺地形図

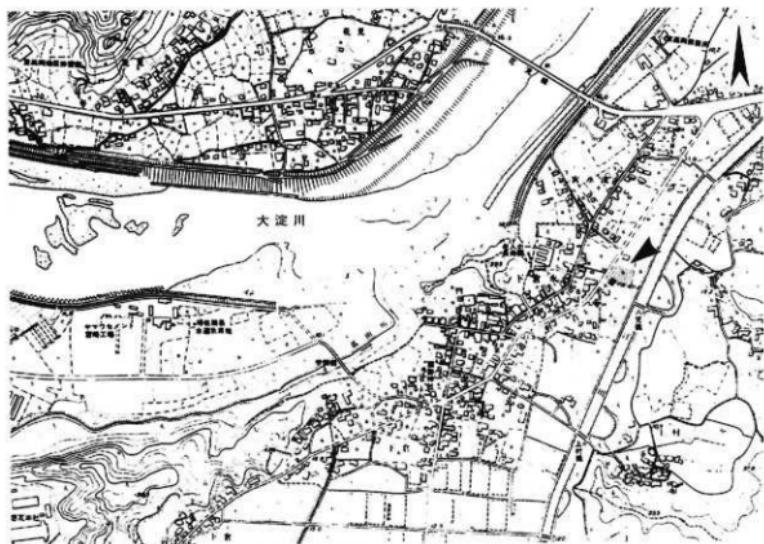
て発掘調査が実施されたすぐ東側である。そのため、遺構の密度と残存状況を把握することを目的として確認調査を実施した。八児遺跡は大淀川と江川に挟まれた微高地上に位置し、北隣の1段低くなった平坦地に宮水流遺跡があり、反対の南側には同じ微高地上位置する学頭遺跡がある。学頭遺跡も八児遺跡第I～II区と同じく県道の拡幅工事に伴う発掘調査において、縄文後晩期の遺物に伴い勾玉等が出土している。確認調査は2m×2mのトレーニングを中心にして7ヶ所設定し、その結果住居址、溝状遺構やビットが検出された。そのため再度事業主との間で協議をおこない、調査経費を診療所部分と共有部分の半分を事業主が負担するということで、高岡町教育委員会と事業主の間で調査の委託契約を締結し発掘調査を実施した。本調査では第三区とし、約1,200m²を調査し、6世紀後半から8世紀にかけての竪穴住居址を12軒と土坑4基、中世の溝状遺構が1条と土坑が35基以上、近世の溝状遺構が2条検出された。竪穴住居址からはカマドが確認され、その内のひとつは煙道が残っていた。近世の溝状遺構は2条がほぼ南北方向に平行しており何らかの区画割り



第6図 八児遺跡位置図



図版13 八児遺跡第三区遺構



第7図 八堀遺跡第Ⅲ区調査地周辺地形図



図版14 八堀遺跡第Ⅲ区確認調査



図版15 八堀遺跡第Ⅲ区確認調査



図版16 八堀遺跡第Ⅲ区作業風景



図版17 八堀遺跡第Ⅲ区全景

がなされていたのではなかろうかと思われる。(島田)

4 内山地区

a 田中遺跡

高岡町では、田中地区においてふるさと農道整備事業における道路の改良工事を計画した。その予定路線が田中遺跡の一部にあたることから、高岡町教育委員会は事業担当課である農地整備課と埋蔵文化財の取り扱いについての協議をおこなった。その結果、教育委員会が確認調査を実施することとなった。この遺跡の周辺では、最北の向屋敷遺跡において後期旧石器時代の遺跡が、さらに田中遺跡の北側の中原遺跡において縄文早期の遺跡が発掘調査されている。また、東側の内山川を挟んだ対岸の丘陵には中世の城館である椿城がある。調査は7月4日におこなわれ、予定路線内に1m×3mのトレンチを3ヶ所設定した。大雨の直後だったため、掘削により水が湧



図版18 田中遺跡



第8図 田中遺跡調査位置図

き出る困難さの中での調査であったが、遺構や遺物は確認されなかった。
(今城)

b 朝羽田遺跡

高岡町では、町中心部の東側の飯田地区において区画整理を計画している。町教育委員会では、その事業が朝羽田遺跡や角ノ園遺跡に影響を与えることから1994年度に事業予定地内7ヶ所で確認調査を実施している。今年度からはその工事年度にあたり、今年度は朝羽田遺跡から南側の山畠が工事予定地となつたため、遺跡周辺であることから確認調査を実施した。ここは、前回の調査では実施していないが、地形的にみると朝羽田遺跡の広がりも推定されるところである。調査は10月3・4日に実施し、2m×15mのトレンチを2ヶ所と2m×5mのトレーニチを2ヶ所設定した。その結果、陶磁器が数点出土したもの遺構は確認されなかつた。(島田)



図版19 朝羽田遺跡



第9図 朝羽田遺跡調査位置図



図版20 高岡麓全景

c 高岡麓遺跡

今年度は町教育委員会が2ヶ所、県文化課が1ヶ所の計3ヶ所実施した。町が実施したところを第8地点と第10地点とし県文化課が実施したところを第9地点としている。県文化課が実施した第9地点は高岡派出所の建設に伴う確認調査である。

高岡麓の成り立ち

諸大名が戦国大名から近世大名へと変質していくために、兵農分離政策によって家臣団を常備軍化し、中世以来続く在地性を払拭していったということは周知のことである。それは、おおよそ家臣団の城下町集住という形でおこなわれたが、薩摩藩の場合は外城制度がとられた。「島津家列朝制度」によれば、外城とは、「御居城」としての「内城」に対して、他の「外衛之城」はすべて外城としている。また、外城は郷とも呼ばれ、天明4年（1784）には外城を郷と呼ばせる法令が出されている。このように、他領のように武士の城下への集住が見られず、外城制度という特殊な制度がとられた背景には、島津氏が一時期九州全土を制圧していたにもかかわらず、秀吉の九州征伐以来2ヶ国半に領土を減少するにあたって、増えすぎた家臣団の整理ができなかつたことが考えられる。薩摩藩の領域には113の外城があるが、その外城の中でも高岡郷は最大級の外城であった。高岡郷の設置は関ヶ原合戦直後の慶長5年（1600）で、「高岡名勝志」によれば、島津義弘が関外の本城として久津良名と呼ばれる地に天ヶ城を命名し、



図版21 高岡麓町屋街路



図版22 高岡麓街路

第10図 高岡製鐵筋剛地形図





図版23 内山神社



図版24 安藤家武家門



図版25 龍福寺跡

外城として取り立てたのがはじまりとしている。設置にあたっては、伊集院の99戸をはじめとして領内各地から516戸の郷士が移住した。関外の郷ということと、佐土原へと通じる重要な街道筋に存在するということから、100石を超えるような様高い郷士が多く集められている（「高岡町史」によれば100石以上の郷士が27軒存在する）。通常ひとつの大城の中には、行政府である地頭仮屋、郷士の聚落である籠、農民聚落の在、漁民聚落の浦、商人聚落の野町に区分されている。地頭は通常唐兒島の城下士が任せられる。外城創設当初の地頭は、任地において政務を指揮していたが、時代が下るにつれて次第に任地に赴かなくなつた。そこで、日常的には郷士年寄・組頭・横目という「所三役」と呼ばれる役人が置かれ、ほかの郷士役人を指図して郷の自治を取り仕切っていた。この「所三役」になる郷士の家格は近世を通じて決まつてはいたようだ。高岡郷のことわざといふものはないが、隣の移佐郷においては数軒の家によって占められていたようである。また、郷士の生活においては、藩より割り当てられる知行地からの収入がその主な経済基盤であるが、少額の郷士などは、養蚕などの副業によってその生活を支えていた。知行地についても下人や小作人を使って大規模な農業経営をおこなっていた郷士はごく一部で、大部分の郷士が手作経営をおこなっていた。いずれにせよ、居住する郷士の規模化を見れば高鍋藩城下町に匹敵するような大規

第11図 高岡鐵道路線位置図



模な籠の中で、禄高と家格による秩序を保つつゝ、ひとつの城下町として近世の間、自治が行われてきたのである。(今城)

(参考文献)

永井哲夫「日向の近世期」(『宮崎県地方史研究紀要』第1号)

『日本の近世』8 村の生活文化

高岡籠の街路と屋敷割り

高岡籠は三方を山で囲まれ、残りの一方は大淀川に面し、地形的には防御的要素を備えている。面積は約60ha以上、文字どおり天ヶ城の籠に広がる近世の都市機能を備えた空間である。籠形式における街路設計は計画的である。街路設計は、天ヶ城の大手門と搦手門にそれぞれ通じる街路を3町の幅で平行に設け、それらの街路の直行するように街路を設けている。この街路は搦手門に通じる街路を2分割することで直行し籠を天ヶ城側と大淀川側の二手に分ける。役場の正門前を走る街路がそれであり、西側に龍福寺西側の山頂を、東側には中山西側の山頂を望む。さらに役場と高岡小学校(地頭仮屋)の間にその街路に対して東に末広がりの状態で街路を設ける。この街路は薩摩街道といわれ、西側に先の街路と同じ龍福寺西側の同じ山頂を、東は丸山住宅用地奥の尾根頂部を望む。これらの4本の街路を基本としながら、さらに数本の街路を設け大街区を設定している。自然地形からの制約の中での最強の防御としての街路設計と考えられるが、十字路がいたるところでみられ俗に言う袋小路的な街路は全く見られない。薩摩藩の東の守りの要、「関外四ヶ郷」の中心外城という緊迫感はさほど感じられない。

屋敷割は、地頭仮屋を中心にして郷士屋敷が拡がり、天ヶ城の大手門から通じる街路沿いと大淀川周辺は町屋が拡がる。郷士屋敷は地頭仮屋周辺は敷地が広く離れるほど狭くなる傾向がある。また、町屋を挟むように大淀川河岸や飯田川周辺に、さらに高福寺(現内山神社周辺)山門前にも郷士屋敷が点在している。町屋は間口の狭い短冊形をなし、新町、上町、下町と呼ばれているところに集中して存在する。このように郷士屋敷群と町屋群は意図的に分けられたものと考えられる。(島田)

(参考文献)

土田充義「高岡籠の町割りと設計手法」

『薩摩藩領内の「籠」計画に関する研究』1992年

高岡町「高岡町史上・下巻」1987年

a 高岡籠遺跡第8地点

調査地は唐仁原家屋敷地跡である。この周辺は石代と呼ばれており天ヶ城の登城口のひとつである。ここに民間の宅地造成が計画されたため、町教育委員会は事業主と埋蔵文化財と取り扱いについて協議をおこない、確認調査を実施することとなつた。調査は5月9日に実施され、トレンチを8ヶ所設定した。その後



図版26 高岡籠遺跡第8地点

	表 土
	淡黄茶褐色弱粘性土
	黄茶褐色土
	淡黄茶褐色弱砂性土
	淡茶褐色砂性土
	黄茶褐色弱粘性土

第12図 高岡麓遺跡第10地点基本柱状図



図版27 高岡麓遺跡第10地点

果、陶磁器類やピット等が確認された。(島田)

b 高岡麓遺跡第10地点

調査の原因は個人の店舗建設である。町教育委員会は事業主と協議をおこない、開発面積が狭いことから建物予定地部分を確認調査の対象とし、建物部分全体を掘削した。その結果、2つの遺構検出面が確認された。まず、表土の下約20cmで確認し溝やピットを確認した。さらに淡茶褐色砂性土の面で土坑を2基検出した。何れも浅く遺物の出土がほとんどないことから時期が特定できない。(島田)

5 浦之名地区



第13図 一里山地区遺跡分布図

今年度は、一里山周辺において県営の緊急畠地帯総合整備事業に伴う農道の改良工事が計画された。町教育委員会では県中部農林振興局と協議をおこない、事業が3遺跡に跨っていることから確認調査を実施することとなった。

a 水流口遺跡

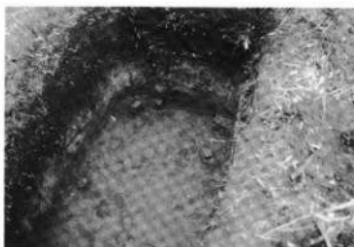
一里山の台地の南端に位置する同遺跡においては、いたるところで焼縄や古墳時代の遺物が表採される。今回の調査は、農道幅に伴う確認調査として $1\text{m} \times 2\text{m}$ のトレンチを8ヶ所設定しておこなったそのすべてのトレンチにおいて表土の下に黒褐色土層、アカホヤ火山灰土、淡褐色土層が確認された。しかし、遺構や遺物は出土しなかった。(今城)



図版28 水流口遺跡

b 久木野遺跡

久木野遺跡は1994年度に農地保全事業による農道新設に伴う発掘調査が実施され、平成8年度において調査報告書が刊行されている。今回調査をおこなったのはこの東側と南側の2ヶ所で、農道拡幅に伴う調査である。前者において、 $1\text{m} \times 1.5\text{m}$ のトレンチを7ヶ所



図版29 久木野遺跡



図版30 茶屋原遺跡



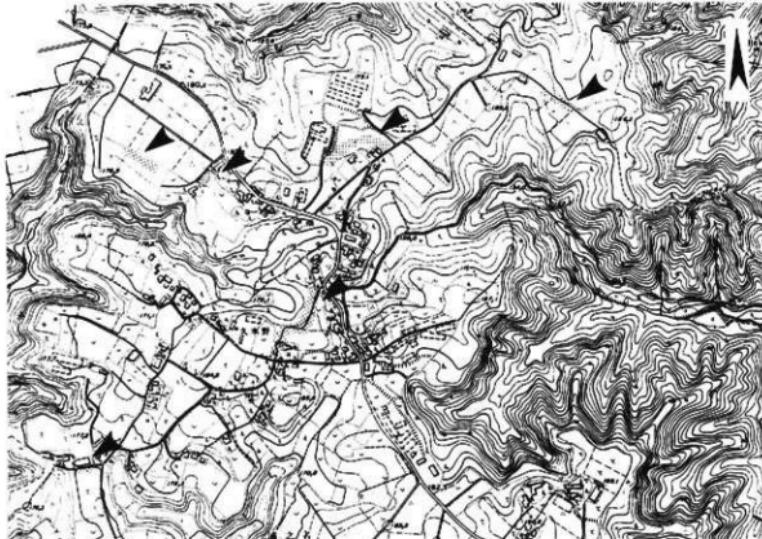
第14図 水流口遺跡調査地周辺地形図

設定し掘削したところ、表土下に一部のトレンチにおいて黒褐色土層が、すべてにおいてアカホヤ火山灰土、淡褐色土層が確認された。また、アカホヤ火山灰土下の淡褐色土層において、すべてのトレンチから、赤く変色した焼跡や縄文土器が数点出土した。

また、後者においても、 $2\text{m} \times 5\text{m}$ のトレンチを2ヶ所設定し、調査をおこなった結果、表土下にわずかなアカホヤ火山灰層と淡褐色土層を確認した。ここでもアカホヤ火山灰土下の淡褐色土層において焼跡と縄文土器が数点出土した。(今城)

c 茶屋原遺跡

農道新設及び拡幅に伴う確認調査として、町道の北側2ヶ所と南側1ヶ所の調査を実施した。町道の北側2ヶ所において6ヶ所のトレンチを、南側において4ヶ所のトレンチを設定し調査をおこなった。北側の3つのトレンチ、南側の2つのトレンチにおいてアカホヤ火山灰土が確認されたが、遺物は確認できなかった。(今城)



第15図 久木野・茶屋原遺跡調査地周辺地形図

III 調査

1 榎原遺跡

- a 遺跡の環境
- b 調査経緯
- c 調査経過
- d 調査概要
- e まとめ

凡 例

1 第18図については下記のとおりである。

重 量

A 1~50g、B 51~100g、C 101~200g、D 201~300g、E 301~400g、F 401~500g、G 501~750g、
H 751~1,000g、I 1,001~2,000g

赤 化

A 全体に強く赤化している。 B 表面が赤化している。 C 赤化が確認できない。

1 横原遺跡

a 遺跡の環境

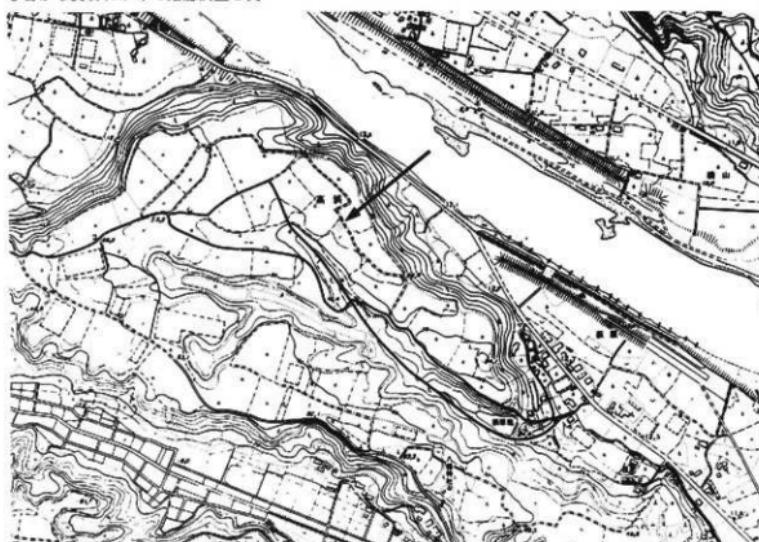
横原遺跡は、大淀川南岸に広がる河岸段丘上の舌状に延びる台地の基部に位置する。台地は標高55m前後で北から南に緩やかに下る。付近には縄文後期の鍋山遺跡や山子遺跡、台地を下ったところには近世の香積寺跡や中世の高浜遺跡等が存在する。大淀川を挟んで対岸の丘陵には縄文早期の橋山第1遺跡がある。また、遺跡付近に寺院があったということであったが場所は特定されていない。

b 調査経緯

1995年10月、教育委員会の埋蔵文化財のパトロール中に農地造成の現場を発見した。現場は周知の遺跡ではなかったものの、横原遺跡や下原遺跡に隣接していることから、教育委員会は現場担当者や地主に対して事情聴取を行った。それによると農地を造成してビニールハウスを建てる計画で、約5,000m²にも及ぶものであった。すでに1,000m²程は削平されていたが、残地の一部が横原遺跡に含まれることから、同年10月25日から30日にかけて確認調査を実



図版31 横原遺跡遺景



第16回 横原遺跡周辺地形図

施した。その結果一番北側に設定したトレンチから縄文早期の土器片と焼穢が出土した。それを受けた教育委員会は再度事業主である地主と協議を行い、遺跡が影響を受ける65m²においては発掘調査を実施することとなった。

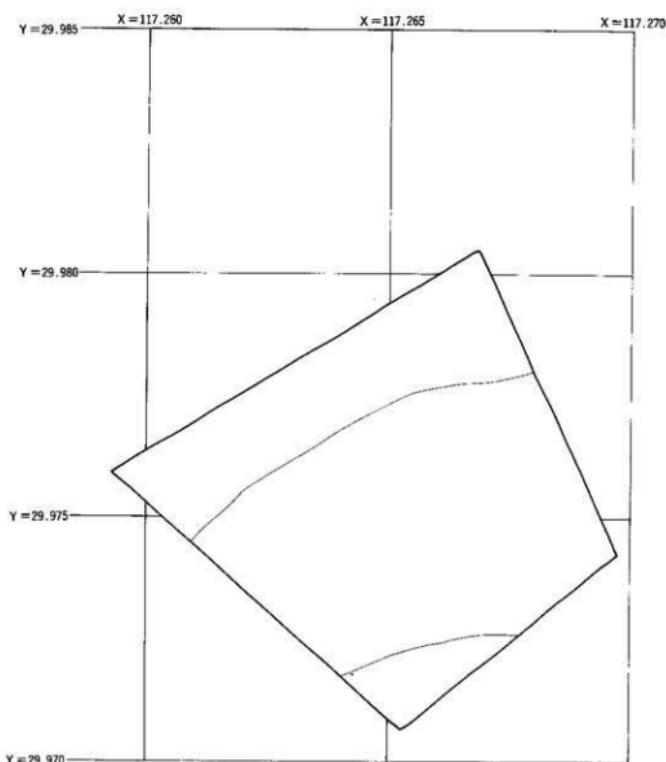
c 調査経過

調査は、1996年5月16日から24日にかけて実施した。表土剥ぎは事業主側から重機の提供があり、アカホヤ火山灰まで掘削し、縄文早期包含層とされる褐色土から作業員による掘削に切り替えた。集石造構等は確認されなかったため、全景写真撮影後に焼穢と遺物の分布図と断面図を作成し調査を終了した。

d 調査概要

〈層位〉

確認調査時の結果も踏まえた榎原遺跡の層位は、耕作土下は以前小規模な造成がおこなわれた為かアカホヤ層が露呈する。その下に青灰色の牛之脛ローム層が堆積するが調査区内では確認されていない。その下は



第17図 榎原遺跡座標関係図

黒褐色土が浅く堆積し、その下に今回の調査で包含層として認識された褐色土粘性土がある。さらに下は黒色硬質ブロックが多数混入した淡褐色土となるが遺物は全く出土しない。

〈遺構〉

礫群

焼砾が褐色土内で北側を中心に480個体以上が分布している。集中して分布するところが2箇所ほどあるが礫の堆積が密に集積しておらず集石遺構として認識するまでは至っていない。ただ集石遺構の残骸として否定するものではない。

礫群の構成礫は、接合作業後で全個体数451個体、重量にして33,737gで、すべて砂岩質である。重量別内訳は、50以下が64.3%（290個体）で一番多く、200g以内で90%以上を占める。最大重量は1,095gである。礫の赤化状況は、表面のみの赤化（B）が32,995g（97.8%）で残りは赤化が確認できないものであった。また強く赤化したものはなかった。

〈遺物〉

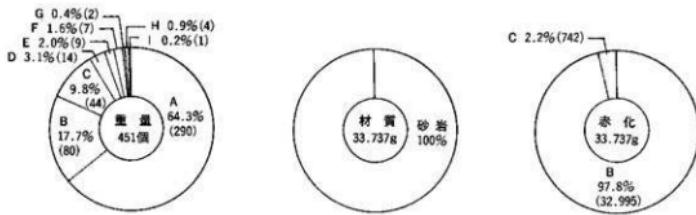
土器（1・2）

縄文土器は褐色土層内から平柄・塞ノ神系の土器が27点出土した。

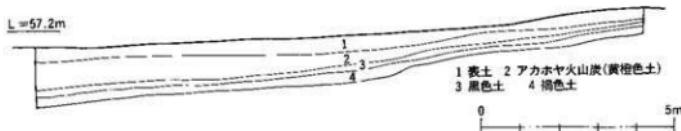
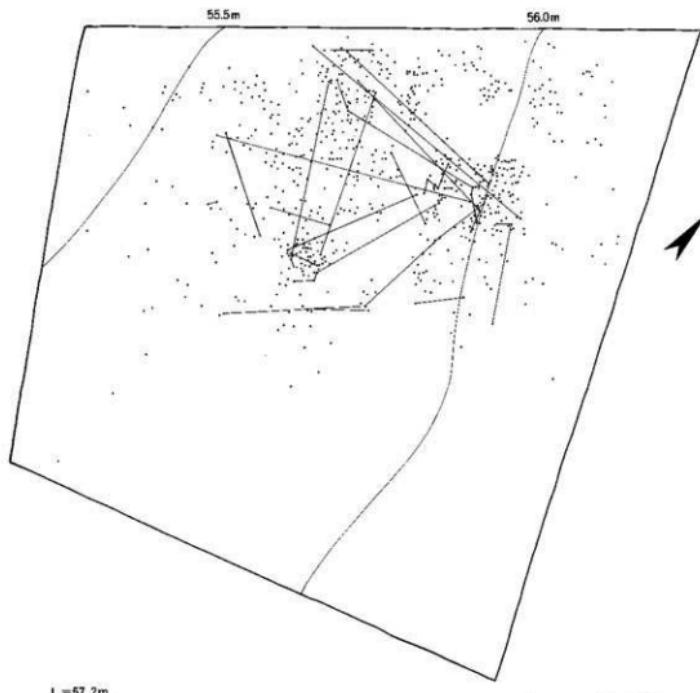
- 1 波状口縁をなしだいく開く。口唇部は斜位の刻目を施し、外面は口縁端に連続刺突文を入れその下に3本単位の凹線を頂部を中心に幾何学文様を描く。内面はナデ調整である。胎土は黒色粒と透明粒を含む。色調は外面がにぶい橙色（Hue7.5YR6/4）、内面は、にぶい黄橙色（Hue10YR7/3）である。
- 2 頸部から胴部にかけてのものである。外面は頸部に連続刺突文を施し、頸部から胴部にかけて撚糸文を縱方向に無文帯と交互に施す。内面はナデ調整である。器形は頸部から大きく外反し胴部は張らない。胎土は、黒色光沢粒と乳白色粒を多く含む。色調は、外面がにぶい橙色（Hue7.5YR7/4）、内面は、にぶい黄橙色（Hue10YR6/3）である。



図版32 横原遺跡全景



第18図 碼群構成礫属性グラフ



第19図 碼群構成礫分布図

石器（3～5）

石器は褐色土内から4点出土した。

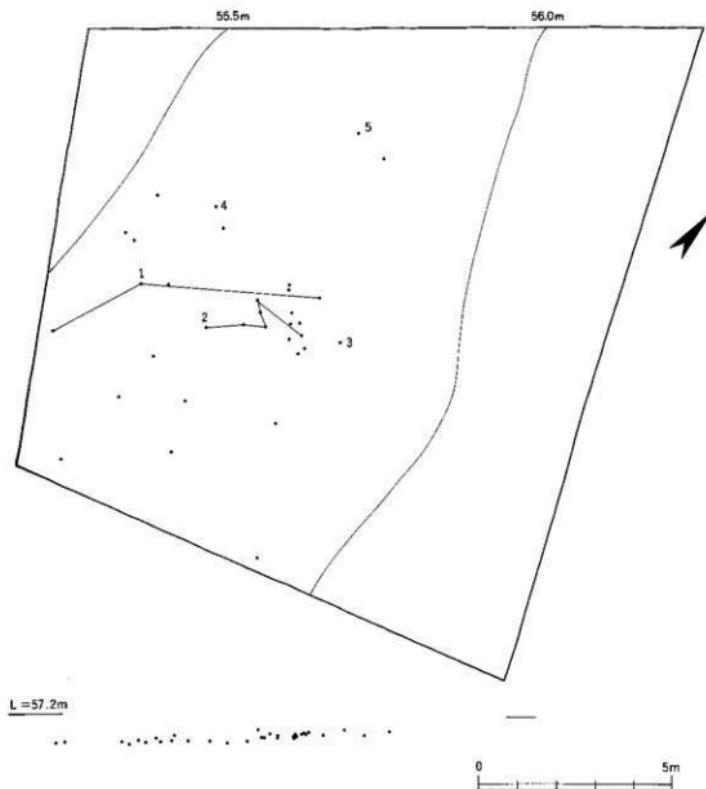
3 赤色頁岩製の石鏃である。器長1.6cm、最大器厚3.4mm、重量0.4gをはかる。かなり丁寧な刃部調整である。

4 姫島産黒曜石を使用した石鏃である。右側基部が欠損している。器長1.9cm以上、器厚3.8mm、重量0.7gをはかる。

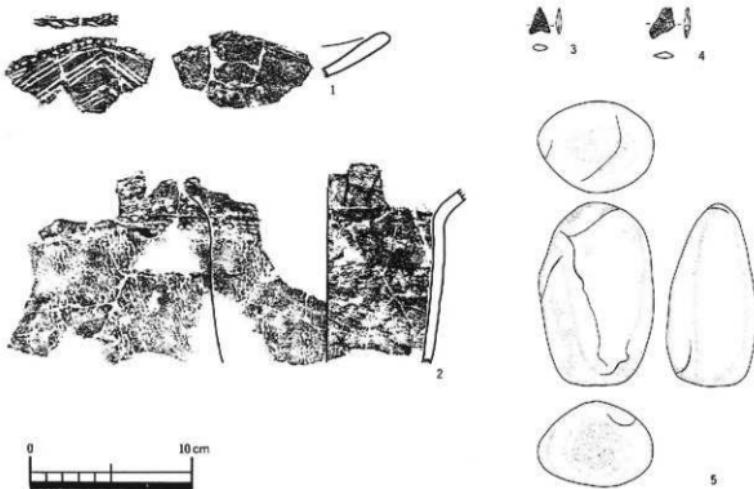
5 砂岩製の敲石である。器長11.4cm、器幅7.1cm、器厚5.6cm、重量gをはかる。上下に敲打痕がみられる。

e まとめ

今回の調査は、調査面積が狭いもののこの台地上では初めての本調査である。遺物では、「桙ノ原式」が出土しており、他の土器片も同一個体かそれと同型式の遺物と思われる。石器は石鏃と敲石で、石鏃は姫島



第20図 遺物分布図



第21図 出土遺物実測図



図版33 焼礫分布状況



図版34 裝文土器(2)出土状況



図版35 裝文土器(1)



図版36 裝文土器(2)

産と遺跡周辺で採取できるとされる赤色頁岩が使用されている。姫島産黒曜石は、対岸の橋山第1遺跡や町西部に位置する久木野遺跡第1区で確認されている。これについては、共伴する遺物との対比も含めて今後検討していかねばならない。

表2 高岡町内遺跡V報告書登録抄

フリガナ	タカオカチヨウナイイセキ
書名	高岡町内遺跡V
シリーズ名	高岡町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第13集
編集者名	島田正浩
発行機関	宮崎県高岡町教育委員会
所在地	宮崎県高岡町大字内山2887
発行年月日	1997.3.31

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	北緯	東緯	調査機関	調査面積	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
姫島第2遺跡	高岡町大字花見4118番地	31°57'29"	131°19'26"	高岡町	20m ²	土砂採取	散布地	縄文	—	—	
小窓遺跡	高岡町大字高浜1807-1	31°56'25"	131°17'15"	高岡町	20m ²	農道新設	散布地	中近世	—	陶磁器	
八荒遺跡 第三回	高岡町大字下曾木98-1	31°56'14"	131°20'45"	高岡町	1200m ²	病院建設	散布地	古墳～近世	住居址 溝 遺構	土師器	
高岡町遺跡 第8地点	高岡町大字内山2722	31°57'33"	131°17'58"	高岡町	160m ²	宅地開発	散布地	近世	柱穴	陶器器	
高岡町遺跡 第10地点	高岡町大字飯田396-1	31°57'12"	131°18'18"	高岡町	100m ²	店舗建設	散布地	近世	pit	—	
朝羽南遺跡	高岡町大字飯田910	31°57'38"	131°18'18"	高岡町	60m ²	区画整理	散布地	近世	—	陶器器	
田中遺跡	高岡町大字五町1801-1	31°57'38"	131°15'44"	高岡町	10m ²	農道新設	散布地	近世	—	—	
水尾11遺跡	高岡町大字浦之名4903-74	31°56'23"	131°12'34"	高岡町	30m ²	農道新設	散布地	縄文～古墳	—	—	
久木野遺跡	高岡町大字浦之名4959-1	31°57'17"	131°12'21"	高岡町	30m ²	農道新設	散布地	縄文	焼土	—	
新麻原遺跡	高岡町大字浦之名5040-20	31°57'32"	131°12'21"	高岡町	50m ²	農道新設	散布地	縄文	—	—	
模原遺跡	高岡町大字高浜1173-1	31°56'40"	131°18'47"	高岡町	65m ²	農地造成	散布地	縄文式土器	縄文式土器	—	

高岡町埋蔵文化財調査報告書第13集

高岡町内遺跡V

1997年3月発行

発行者 宮崎県高岡町教育委員会
宮崎県東諸県郡高岡町大字内山2887
〒880-22 ☎ 0985-82-1111

印刷所 特 宮 崎 南 印 刷
宮崎市大字田吉350-1
〒880 ☎ 0985-51-2745